

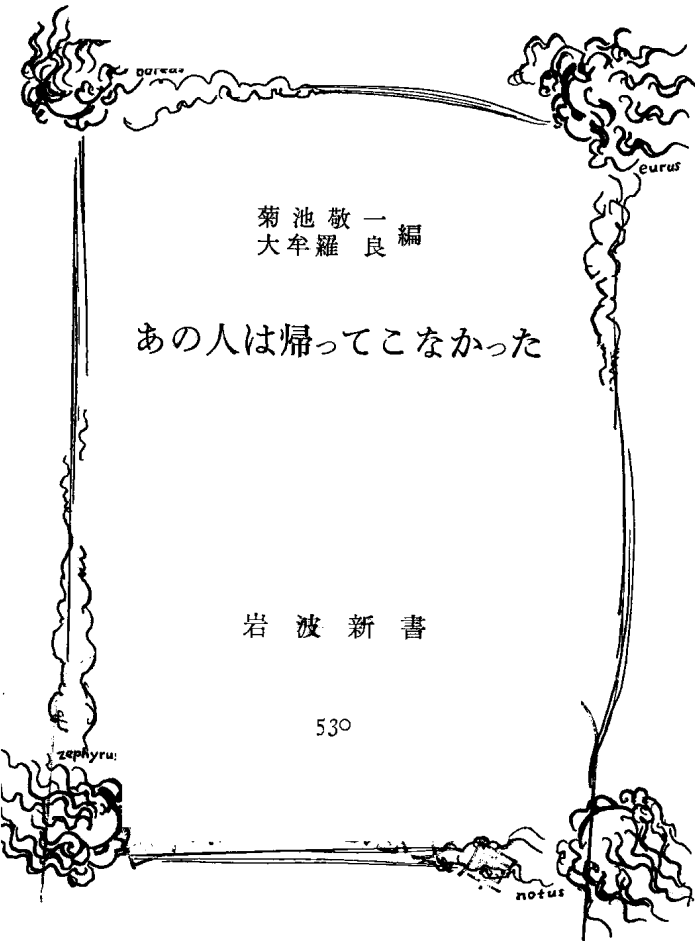
菊池敬一 編
大牟羅良

あの人は帰ってこなかった



岩波新書

530



菊池敬一 編
大牟羅良

あの人は帰ってこなかった

岩波新書

530

菊池敬一

1920年岩手県に生まれる

1942年岩手師範学校本科卒業

現在一岩手県和賀郡和賀町東中学校勤務

著書一「みちのくの世界考」

「おしらさま」(民話絵本, 共著)

「きつねのおきてがみ」(民話絵本, 共著)

大牟羅良

1909年岩手県に生まれる

現在一岩手県国民健康保険団体連合会に

勤務

著書一「荒廃する農村と医療」(共著)

「ものいわぬ農民」(以上岩波新書)

編書一「戦没農民兵士の手紙」(共編, 岩波新書)

「北上山系に生存す」

あの人は帰ってこなかった

岩波新書(青版) 530

1964年7月20日 第1刷発行 ©

1977年7月20日 第14刷発行

¥ 280

編者	きく 菊 おお 大	ち 池 む 牟	けい 敬 ら 羅	いち 一 りょう 良
----	--------------------	------------------	-------------------	---------------------

発行者 岩波雄二郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

まえがき

第一部 勲章の裏に刻む…………… 1

あれから二十年……………	小原ミチ……………	2
誰に言われてもいい……………	小原さの……………	22
鎌抱いて寝て……………	菊池マサノ……………	40
死ぬにも死ねずに……………	伊藤俊江……………	58
夢まで悲しい……………	小原こめ……………	72

第二部 叫ばずに来た二十年

すべてが運命……………	菊池ナカ……………	86
遺児だけ命……………	小原ヒサ……………	100
何時かは人並みに……………	小原サノ……………	114
望みを託せるもの……………	照井るり……………	126
流れの中で……………	涙にとぎれる声……………	143
山蔭の部落……………	敬遠された対談……………	
沈黙の中にひそむもの……………	信じ得ない戦死……………	
選ばなかった再婚の道……………	胸に生きている夫……………	
反撥に生きる……………	注がれる監視の目……………	
国が下さった我慢料……………	募りゆく悲しみ……………	
ひとり身はつらいか……………	何故語らなかった……………	

路傍にある墓石

この人にこの嘆きが

すべては宿命だった？

第一部 勲章の裏に刻む



あれから二十年

オレの一生は、炭に焼きかねてしまつて、
土になつた入山いれやまの薪みたいなのス

小お原ばら ミ チ

あの人と一緒に暮したのは、たった五ヵ月だったモ。オレ、嫁に来たのは昭和十七年の春、十八になる時だったモ。そして秋の十月に召集来て征つたのだからナス。

五ヵ月一緒に暮したっていつでも、まるで夢中で暮した五ヵ月だったからナス。春さきの、忙しい田植時に来て、百姓の仕方もまるっきり知らないもんだから、ただあの人さ、くっついてばかり働いて、どうやらあの人のがん心もわかつて来たな、と思つたころすぐ別れてしまったようなもんだったナス。たった五ヵ月一緒に暮したつきりだったんだが、それでもその時、運が良かったか、悪かったんだか、もう腹さ子供入って二ヵ月になっていたったモ。

召集のかかった日、ちやうど入山いれやまの炭窯の窯打ちの日でナス。入山の沢まで歩いて二時間

半もかかる処だから、朝暗いうちに家の人達みんなと出て行ってナス。ちょうどその日は、山さ初雪降った日だったナス。じさま(爺様)とばさま(婆様)とあの人(夫)と四人で沢を登っていったの忘れられないマス。四人してそろって稼いだの、あの目で終りだったモ。

四人してやっと窯打ち終って一あんどして休んでいたれば、窯のハヂ(鉢―天井)、ドサツと音たてて落ちてしまったノス。その時オレ、これエ何か悪い事おきるのでねエかと、胸だぐれ(胸さわぎ)したったンス。あの人顔をみたらば、あの人もやっぱし何か感じたったとみえてス、面白くねエ顔して、「やめるべハ」っていつてナス、窯ハ、そのままにして山をさがったったノス。

虫の知らせというもんだったベモ。暗くなつてから家さついで見たら、やっぱし召集

小原ミチ 略歴

岩手県和賀郡和賀町横川目松ノ木部落に生まれた。昭和十七年春十八歳で同町横川目荒屋部落の小原徳志の嫁になった。昭和十七年十月、結婚生活五カ月で夫徳志は召集された。その時ミチは妊娠二カ月だった。昭和十七年十二月二十四日、兵役中の義弟勉が満州(現在の中国東北)牡丹江で戦病死した。夫徳志は、昭和十九年四月十二日、ニューギニヤ・バプア・ポトポトムで二十六歳で戦病死した。曹長になった。ミチは二十歳だった。製炭業を本業とする家庭に、舅姑老夫婦と義妹とミチが残った。間もなく姑は病死し、舅は長い間病氣加療の上病死した。娘トミは昭和三十七年結婚し、生れた孫と合せて現在四人家族である。三十九歳になった。

(令状)が来ていたったモ。

あの人、「二年たった俺エ帰えって来るから、それまでがまんして待ってろ」って言って、たつ時オレのところ籍(戸籍)を入れてくれたったンス。あの人、前に、現役で北支さ行って何回も戦争というものして来た話聞かされていたから、オレも大丈夫この人ハ生きて帰って来る、と思ってその話信じていたったノス。

でも今考えて見ると、あの中人は、帰えれないとハ、思つて、腹のワラシ(子供)のことだの、親のことだの考えて、籍入れたり、あんなこといたりしたのだったべとも思うナス。

明日^{あした}たつという前の晩、みんな集つて出征祝^{たちごらまひ}してくれた時、あの人急に座敷から見えなくなつてしまつたつたノス。オレ、どこさ行つたべ、と思つてさがしたれば、暗い秘屋^{へや}(寢所)の床の上さ黙つてあぐらかいて座つていたつたノス。オレのところ見たれば、「俺なあ……」っていつたつきり黙つて動かないで座つていたつたモ。今でも、オレ、ハ、その氣持わかるマス。だれエナッス、喜んで行く人、どこの世界にあるペナッス。酒のんだつて、騒いだつて、なんじよしてその氣持消えるペナッス。オレもハ、泣いてばかりしまつて、ろくな力^{ちから}付けも出来ないでしまつたつたモ。

部隊さ入隊して間もなく、支那さ渡るといふ報らせもらつてナス、家の人達とその時その列

車が通過するという北上駅さ会いに行ったノス。それでもその時会えませんでしたノス。今考えると、とっても口惜しいマス。

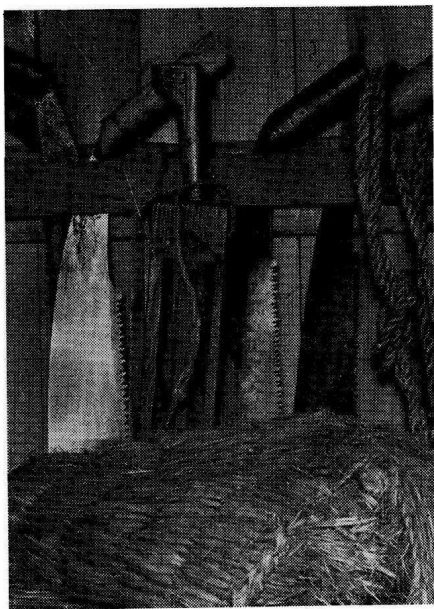
北上駅は、その日まるっきり人でぎっしりで、ホームは動きむじり(身動き)も出来なくてナス。オレ、ハ、大っきな腹かかえて、紙きれさ、『小原徳志』と書いたのを持って、「こういう兵隊どこに乗ってるべ」って窓から窓さ聞いて歩いたノス。そうしたらちようど覚えていてくれた兵隊あって、「その兵隊だったら、先から何輛目さ乗ってる」って教えてくれたノス。そだども(そうだけれども)、その時、何分間だかの停車時間、もう無くなってしまった時で、とても見つけれなかったモ。列車動き出した時、うんと名前呼んで叫んだたども、とうとう見つけれなかったモ。後でひとから聞いたれば、運よくすぐあの人の傍さ行けた人もあって、「俺エのミチ来ているが、どこにいた」って一生懸命窓から体出してのり上っていたっけというノス。それでもやっぱりそのまま見つけないで行ってしまったっけ、という話だったモ。家で、勉(夫の弟)現役でとられていったのさ、今度またあの人召集でいったもんだから、じさまもまるで力落してしまって、だんだ(だんだん)に人も変って来てナス。もともとあの通り気の強い人だったども、だんだんに荒くなって来てナス。それでもじさまもばさまもまだその頃丈夫で一生懸命働いてくれて好かったナス。

そうしたら、あの人いって間もなく勉の戦病死の公報入ったノス。そうしたら、ばさま、まるっきり力落してがっくりなってその頃から弱り始めたったノス。

あの人さ手紙は何回も何回も書いたマス。それでも一回も返事は来なかったモ。トミ(娘)生れたときも、すぐ写真とって送ったども、それも見たんだか見ないでしまったんだか。なに、見ないでしまったべという話だモ。後で死んだ時のこと教えてくれた戦友の人の話でも、子供の話は、あの人いっこうにしなかったって言うっけモ。

それから年寄りとおれ見てエなワラシだか大人だかわからねエ者ばかり残って、まるっきり苦勞したンス。炭焼きでばかり食っているのだから、ほかの仕事と違って、木を伐る^きったって、そいつを運ぶったって、山から炭を背負って下げるったって、まるで力仕事ばかりだからナス。トミが育つ時、山でばかり一人して投げ^{いれ}放しで育てられたようなもんだンス。朝暗いうちに背中さしょって、じさまの後さついて入山^{いれやま}まで登って、あと、おれが稼いでいる側で一人で遊ばされてナス。それでも、じさま、二俵も三俵も背負って暗くなってから下りて来るの見れば、おれも、がまんしなくてはならないと思って稼いだったモ。

夜も十二時頃まで毎晩トバ(炭小屋の囲いにする葦の編物)編みだの縄ないしたノス。なに二年がまんすればええ。二年たって、トミ二つになれば、あの人帰って来る、とばかり思ってが



夫・徳志氏が愛用した炭焼き道具だという

まんしたノス。

そのちょうど二年目の、やっぱしその時も入山さ初雪の降った日だったナス。

その日入山さ炭上げに行って、雪が降ると炭下げるのに大変だからって、暗くなるまでかって家さ炭背負って帰って来たれば、「なんでも徳志戦死したらしいという話だじエ」って本家のじさま知らせさ来たノス。

その時ほんとに目の前くらんだようになっただったノス。二、三日前に神様(巫女^{みこ})さいって聞いたれば、「南の方で生きている。この人だったら絶対死なねエから心配することねエ」っていわれて来たばかりだったし、声をたてて泣いたったマス。じさまもばさまも、がくっとしてしまっ、それでも、みんなし

て早速家の中さ入って仏壇さ水上げたり線香上げたりしたったマス。

本家のじさまの話だと、市一殿いちかす(同村の製材業者)、平泉さ木買いに行ったら、ニューギニヤから死ぬか生きるかの目に会って、やっと帰還して来た人に会ったんだとス。それで、「横川目村の人達のことを知らねえか」って聞いたれば、その人まるっきりボロボロになった手帳出して、「俺のわかつてるのはこの位だ」ってその手帳に書いてあるのを見せてくれたんだとス。そうしたれば、鉛筆でいっぱい人の名前を書いてある中さ、小原徳志というのもあって、その名前の上を線引いて消してあったんだとス。

その晩は、一晚中寝ないで泣いたったマス。神様も仏様も有るもんでねえと思ったたナス。あの人なんぼこんな暮ししても、物を大事にしてきちんとしておく人だったから、現役でいた時のアルバムだの、さまざま自分で買った本だのオレも大事にしていつも出して見ては、「帰って来た時ほめてもらうべ」なんて思っていたのも、まるでう皆取って投げてしまいたいような気になったったマス。なにこれだったら、オレ、ただこの家の残った年寄り達をあげかう(養う)ためにばかり来たようなもんだ、と思ったり、いっとごま(ちよつとの間)あの人のところ、現役から家へ、ワラシこしらえさせに(子供をつくらせに)国で帰してよこしたもんだべ、なんてばかり思えて来て、これだれば(これならば)ワラシ連れて死んでしまった方がまし

でなかべか、と思ったりしてナス。

そうだったモ。少し前におかしな夢みたったモ。

夜中に、ハンテン着て鳥打ち帽かぶった、背の高い、青つつらな長い顔した男入って来て、オレの枕元さぼおーっと立ってナス。そしてトミのこと起こしてゼニッコ(錢)くれるって言うノス。オレ、びっくりして、トミのことぎっちり抱いて、「貰ってはだめだ、貰ってはだめだじエ」ってうんと叫んだれば、その男、裏の口から戸を開けて逃げていったノス。

目覚して胸騒ぎして、まるで氣持悪くて、それでもこったな話をする、と、じさまやばさまに心配かけると思つて、夜の明けのを待つて外さ出て見たノス。足跡もなんにもハ無かったもナス。

その人だったモ。夢で見たのその人だったモ、平泉の人は。市一殿から聞いたつぎの日、じさまとすぐ平泉のその人さ会いに行った時、見るなり、「そうだ、この人だ」と思つたモ。その人の話だと、ニューギニヤのボトボトムとかいうところで、マラリヤに罹つて、穴の中で四日苦しんで死んだという話だったモ。

それから家の中はまるっきり變つてしまつたモ。

ばさまの病氣はみるみる悪くなって間もなく死んでしまったし、じさまはますます荒っぽくなってしまって、まるで人変わったようになってしまったモ。子供に二人も戦死されて家の中でたよりにならねエオレみたいな者と暮さなければならねエということになれば、むずい（可哀想な）ところもあったったマス。

いつものように二人して山さいつて働いて帰エって来ても、何か氣にくわないことあると、「俺エ男の子供二人もあったんだ。何も他人の飯を食わなくてもいい身分だったんだ」って、夕飯こしらえてもお膳さハ寄らなかつたモ。なんとかして氣を悪くさせないようにしたいもんだ、と思つて、氣をそらさねエようにそらさねエようにと機嫌をとつたノス。機嫌のいい時はずっとも親切で、なんでも相談にものつてくれていい人だったども、また怒られるのでねエかとびくびくしてばかりいたつたナス。「他人の飯食いたくねエ」っていわれた時、いろいろ考へて、トミさ飯持つて行かせればええ、トミは他人でねエんだから、と思つてそうばかりして飯食つてもらつたつたマス。

未亡人になつたとなつたれば、世間の人達まるつきり勝手なことというもんだナス。中には、「いっそのことじさまと一緒に（夫婦に）なつたらよがんばえじえ」とまでいった人もあつたという話だったマス。冗談にいったことだべども、中にはそんな目で見てる人もあつたんだベナ

ス。

なんべん家を出るべ、と思ったかわからねエナス。トミは今もいうナス。「かっちゃん（おかあさん）泣いて家出て行くのさ、オレも泣きながら暗いところ追っかけて走って行ったっけナ」って。トミ抱いて外さ出て、家の中さ入りかねて、外さ立って一時間も二時間もすごしたり、あと、よその木小屋さ一晚寝て朝早く入って朝飯炊いたことも一度や二度でなかったナス。

他所さ日手間取り（日雇）に行って遅くなって帰って来ると、「戦死者の妻のくせに夜遅くだらしねエ」って、入口さ棒かって中さ入れられねエことも有ったったンス。

疲れて山から帰って来た時でも、じさまが寝ないで起きているうちは寝ないで十一時までも十二時までスゴ（炭俵）編みしたり縄ないしたりしてナス。後そのままハ、そこさ眠ってしまつて夜明かししたりしたことあつたつたナス。

それでも、この娘一人前にするまでなんとしたつてオレがまんし通さなければならねエ、と思つてばかりがん張つたノス。トミは父親の顔も知らないんだし、せめて父親というものの思い出ばかりもつくつてやりたいと思つて、あの人の遺骨を墓さ埋めないで仏壇にかざつて、「これがお前の父さんの遺骨だじエ」っていい聞かせながら育てたノス。遺骨もらつたのトミ四つになる年だったから、トミ物心ついて話わかるようになる七つまでそうしていたつたマス。そ